慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	追悼森武之助先生と斯道文庫
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1989
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.24 (1989.) ,p.451- 455
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000024-0451

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

追悼

森武之助先生と斯道文庫

斯道文庫は本年十二月を迎え、創立三十年の歳月を閲することになる。一口に三十年とは申せ、その間の出来事は様々に回顧されるのである。まずは、草創期の多難な時代を荷われた諸先生方は既に物故され、次期を継承された森先生も又去る二月一日に遐世されて、当時の若輩であった我々が、此の研究所の責務を分担しなければならぬ年齢となってしまったのである。想えば一面永い年月であり、今日の文庫を育成されて下さった諸先生方の在りし日の事どもが髣髴として偲ばれるのである。

森先生と斯道文庫との係り合いはふるく、此の研究所設立、昭和三十五年十二月以前からのことである。多分、旧斯道文庫蔵書約七万冊が麻生産業社主太賀吉翁より、昭和三十三年、本塾創立百年を祝して寄贈された、その年の頃の事であろうかと憶われる。後々、文庫の主事、文庫長として八面六臂の辣腕を振われ、文庫の研究計画、事業計画のすべてを立案、育成された、我々畏敬の故阿部隆一先生との接触が、その最初であろう。当時、慶応の文学部は新制大学大学院設置後、数年経過した時期にすぎず、学問の研究大勢においてはまだまだ明確な指導理念の徹底さを欠く処は否まれなかった。殊に文献学上の対処においては摸索の時代であったかと思われる。

この時期、阿部隆一先生は慶応義塾図書館和漢書課長の職に在り、将に目を見張る広範なる古典籍の蒐書活動の

許、大学院生の教導にも当られていた。そして、偶々旧斯道文庫の寄贈を機に、故佐藤信彦教授、森先生等と語られ意企されたのが、本文庫の以後における研究計画のひとつの柱ともなる「我が国古典に関する室町以前成立の注釈書並に室町物語類の研究」である。先生は、戦前、既に文献分野での斯界の碩学横山重氏を中心とする『室町時代物語集』五巻の一大編著の参劃者の一人でもあり、上記研究計画には、我々一同にとっては、未熟というより皆目模糊たる領域での、いつも心暖る佳き先達であった。

やはり、同年頃の事でもある、横山重氏蔵書の中、室町物語類の大部にわたる購入には、阿部先生と共に尽力され、後年の文庫における同物語の劃期的成果も、振返り辿れば、其処に逢着するのである。私事にわたるが、天理図書館を主とする奈良・京都方面の訪書の旅も、松本隆信前文庫長と共に古書には全く無智なる我々に、さりげない示唆によって教導された日々が想いかえされるのである。

斯道文庫に委員として直接に参劃されたのは昭和三十九年四月からである。其の間、文学部国文学科にあって中世・近世文学を担当され、昭和三十四年には、横山重氏との編著―その例言に同氏が誌すごとく先生の労作―『初期仮名草子集』の刊行、続く同三十七年、先生の学位論文となられた『浄瑠璃物語研究　資料と研究』は、新制大学設置後の、国文学専攻の第一号であると共に、当時の、未だ文献資料蒐集も儘ならぬ時代にあって、伝存本の網羅と本文の緻密な整理を核に、その文献処理の方法論を学界に提示されたのである。それは単に伝存本本文の文献学的研究にとどまらず、同時代の文芸手法の究明と具像化とを併せ包み込んだ先生ならではの高著であった。前記の編著と共に近世文芸への展開の礎石をと計画されていたのであろう。

三田山上の文献学的研究は、徐々にではあるが、着実に方向を定めて歩みはじめていったのである。

先生が斯道文庫長になられたのは、故佐藤信彦教授の後を受けられた昭和四十三年十月からである。文庫設立から間もなく十年を迎えようとする草創から漸く結実の成果を期待される時期にも当面していた。我々研究員も稍々ではあるが、自信と自負のごときものが芽生えてくる年齢に到達していたのである。自ら其処には、とかくすると、佶屈しがちな人間模様も時に織りなされ、相互には疎外意識の生ずるのも、唯研究所という世上と半ば隔離された特殊な事情に由るばかりではない。その草創の緊迫から知らぬ間に弛緩してゆく人間の弱き性情のごときものも其処にはあったのではなかろうかと考えられる。ともかくも、ひとつの転機にさしかゝっていた。

創設期以来、文庫主事として、その運営のすべて敏腕に掌握し統率して来たった阿部教授にとって見過し得るところではない。此処一番の中押しと文庫員には一層に厳格に対処されるのは、今から想えば至極当然の結論である。次々と新たな立案を謀られ、文庫運営資金の補助対策として、斯道文庫賛助委員会の設置、又研究計画の充実と養成指導を兼ねた研究嘱託制度の導入、大学院生を対象とする斯道文庫講座の新設等々、此の期を前後する、昭和三十九年、同四十四年、同四十七年と相続き、我々研究員にとっては真にめまぐるしい変動の一時期であった。小さな一研究所であるからに猶、その統率者は衆議を諮る以前に時ならず独断に処するのほかなく、我々としては唯々として、その事後指示を俟つばかりの日々でもあった。結果が是であるにせよ、其処は人間の趨勢として自ら又、齟齬を生ずるのも已得ぬ間隙故のことではなかったかと思出されるのである。

この多端な時機に、森先生は文庫長に就任され、しかも、昭和五十一年の九月迄、四期八年間の永い歳月にわたり、その職責を果たされたのである。顧みて、それは偏えに先生の恬淡、自然の人格のしからしむるところに帰せられるものである。

その時分、旧図書館地階の—通称穴蔵—斯道文庫にも名ばかりの文庫長室はあった。しかし、先生はついぞ、その部屋に独座されることはなく、雑然たる事務室の古椅子に安座され、文庫運営の議についてさえも淡々とさりげなく諮られるのが常であった。ことさらな官僚的密閉主義、権威主義を厭悪されてのことばかりではなかろうが、我々文庫員が知らず識らずに渦中に参加してゆくのを意図されていたのかもしれない。あるいは、又、研究所にありがちな偏倚な独善をなにげない円座の対話のうちに解消するのを目論まれていたのかもしれない。ともかくも、知識のための知識を奢る自己顕示に対しては、温和な言葉の端々に峻拒する姿勢は崩されなかった。

しかし、一方、斯道文庫の研究計画、事業計画については、徒らに人事の刷新を以って機運の転換を計るがごとき安易な便法は殊更に忌避され、偶々、私などには、「阿部以外に誰もいないからには、彼のやりかたに従うのほかはあるまい」と、ことは余談に学問の厳格さと現状の具体的対処を訓戒する現実的一面を併持されておられた。

この現実面に対応される先生の方針には、何か、ひとつの自然な流れのごときものが感知されるのであった。その日常生活においてもそうであった。唯に学究の中に耽溺する愚かさを嗤われ、文芸のなかに、はたまた、美酒、芳味のうちにも、其処には、心の遊びのごとき工まざる意匠が絶えずに漂ようていた。そうしたなかに培われたのでもあろうか、偏固一辺倒の学究には見ぬところの自他の主義主張を超えた滑脱、自在な人間への許容精神がいわば自らなる和を文庫の隅々に浸透させていったのであろう。当時の我々研究員は唯尋常、自然のことゝ受けとめ、何の懸念もなく、柔熟な志向を一途の寄辺として、いつの間にか八ヶ年の永き歳月にわたってお頼り申上げていたことを今更ながらに痛感するのである。又、御在任中には、太田次男・松本隆信両名誉教授、下って私のごとき者迄にも学位取得の労を荷われるなど細やかに御心労賜ったことに憶いをいたすと、謹しんで深謝の念に耐えないもの

が込み上げてくるのである。

かような雑記のごときを判読下されゝば、先生の、一見、豪放、磊落、加えて大正期のリベラリズムをのみ想起されるであろうが、しかし、一方御自身においては、自個を囲遶する人々に対する常に周到にして、細密な、絶えざるお心配りを以って律せられた日々が、泌々と重く感ぜられるのである。

そして又、時に已得ず執筆される多彩な随筆の中には洒脱に戯画化されている先生の酔余の微苦笑を見出すのである。晩景、洗足学園魚津短期大学に数年を過され、御退職に際し、同研究室において編集、刊行された洒落た袖珍本、戯れの外題『塵芥撰述』の中の、その一章、「老耄立腹談義」の結びに、午下の散策の後の、その感懐を、

腹が立つと足が早くなるのか、間もなく家に着いた。早速、お湯に入って一杯始めたが、疲れたせいか、お酒が早く廻る。そうなると弾みがついて来て、ちゅう、ちゅうと飲んでいるうちに、すっかり気分が変化して来た。朝からの老人性立腹性など嘘のようである。しかし、こう簡単に、温厚円熟の境に達してしまうのも、どうかと思う、と反省しかけたが、もうそっちの方へ、思考を向けられる状態ではなくなっていて、代りに鼻唄が出て来た。

腹の立つ時や、茶碗で酒を、はあ、飲んだとね――。

と。老晩の精神風景の一端については、その生涯にわたってつづけられた晩酌のなかに唯々綽々として戯咲しておられる、その陶酔の破顔が今更に眼前に偲ばれてならない。

平成二年三月

平澤五郎誌